

東京大空襲と戦って

千エロ・中江弘子

中央二丁目

あの恐怖の異様なサイレンが「ウ、ウ、ウーッ」と鳴り響いた。はじめは偵察でその情報が流れたかと思うと、こんどはすぐまたB29の襲来でたちまち悪夢を誘った。物心がつく頃には戦争の兆しで私の少女時代は厳しいファンタジーだった。

第二次世界大戦で恰も戦争が激しくなった頃には、モンペをはいで防空頭巾と救急袋を下げての登校だった。もちろん洋服には名札を明記し、裏には（身頃の衿元、背中に）ハッキリと住所、氏名と年齢、縁故先、血液型まで書いて縫い付けた服を着て通っていた。

東部軍管区情報とか、大本営発表などのニュースが力強く流れた。

当時私は中学二年だった。学徒動員となって汽車製造株式会社で、軍需産業の一環としての铸件による塗かた作業をしたのである。铸件鑄造の工程で型をつくる前の作業だった。予め型あらかじが定まっており、その型に材料の砂を入れて、タンクの型をしたのを次々と沢山つくった。馴れないうちはでき上がった型が

崩れたりして、またやり直して意外と難しかった。

あの大きな電気炉で焼いて固定するまでの铸件作業の一部が、私の中学二年の時の学徒動員の仕事だった。私のセクションは難しいところの配属のようだった。

「鉄は熱いうちに鍛えねばならぬ」のことわざではないが、熱い柔軟性のある焼かれた鉄を成型づける作業場もあった。

当時、城東区にある汽車会社は規模が広く、全国各地から学徒動員や挺身隊が集中していた。

私の隣の配属は、早稲田大学と安田工業学校の先輩たちで占めていた。私は、石島中学だった。そんな事情から、学童疎開もせずに学徒動員として最後の最後まで頑張り、国の軍需産業のちいさな担い手となったのである。

三月九日の朝、母と姉が疎開先の茨城県へ手荷物を持てるだけ持って出かけた。そして、その晩の本所・深川などが襲われた東京大空襲で、家は丸焼けとなり、家族は散り散りばらばらになったのである。

私は火の粉を払い除けながら火災を振り切り振り切り、必死となつて人々の逃げる方向にあとをついて閑静な江戸川方面に向かつていた。

私は必死でなんとか生きようとひとりぼっちになつて無我夢中で逃げまくつた。地上は火の海と化した。熱くて熱くてどうしようもない。人々は次から次へと熱風に足をすくわれるようにコロコロと転がって倒れていった。私は川の中に飛び込んだ。筏につかまつたが、筏がつるつるしてすべつて、私には泳ぐことすらできず、長時間水との戦いで疲労に疲労が重なつてグツグツとすたすたして途方にくれながらなおも必死となつて救助を求めて大声を張り上げた。

その時である。偶然にも私の声を聞きつけた兄がその声を確認すると、何処からかロープを探してきて投げたが、どうもうまくいかない。その寸前、私は悪夢を見ていたのである。眠くて眠くて仕方がない、奇麗な園の夢だった。三途の川の夢を見たのだ。兄は「眠るとダメだ」といつて私を強く励ました。私は疲労に疲労を重ねた揚句、やっと引き上げられた。

死の境界線をさまよつた此の時の戦争の実情は、たとえ書物で何十冊と書き表したとて理解されなれないと思う。また私がこの実情を話しても、書物で表現するにしても、同じ境地にあつたもの同士でなければ理解されるのに至極困難だと思ふ。

やがて十日の朝を迎えた。一夜にして辺りは一面焼け野原と

なつた東京。私たち兄妹は戦災証明書を貰い、おにぎりの配給を受けて、方向の見当をつけて江戸川から上野まで素足で歩き、やっと上野駅にたどり着いた。途中あつちこつちに死骸の山があり、その上にトタンが載せられてあつたり、地面は人間の油でにじみ異様な臭気で満ちていた。その中で私たちは無事に汽車に乗つて、母のいる目的地の駅にやっとたどり着いたのである。だが、駅から約一里もある道のりで、どうやって行くのかわく分らない。幸い縁故疎開であつたため、幼い頃来たことがあつたのを思い起こしながら、尋ね尋ねてようやく母のいるところに着いた。

涙の再会だつた。母はその晩、私の首が吹っ飛んだ悪夢を見たのである。父はいない。その時母の声はかすれて息づまり、胸がつかえた。

私は瞳をひどくやられていたのでまぶしかつた。この時の足の皮膚のやけどの跡も今だに残っている。私にとって生涯忘れ得ぬものとなつたのである。

人間、つらい目にあつた記憶は忘れようという本能が働くものだが、この時のつらさは忘れようとしても忘れられないのである。

疎開先では、田舎の子供たちが寄つてきては東京の子だといつて破れた障子の穴から覗いて私を覗いていた。まるで見世物ではあるまいし、その上「東京の焼け出され」などとよく言われ

た。何処に行くのにも、まるでじろじろと見張りをされているかのように視られた。私には腹が立ったことが多かった。

しかし戦争はまだ続いている。遊んでいるものは当時非国民だといわれた。そこで私は近くにある軍属に入った。遙かに航空廠と霞ヶ浦を近くにひかえて、七つボタンの予科練の歌声が響きわたっている。叔父の家族で優秀なS氏は航空廠に勤めていた。しかし彼は結核で若くしてのち、この世を去った。

そこで私たちは母子は母の兄の家での居候生活だった。そして間もなく終戦を迎えた。こうした私の少女時代は戦時中で、一にも二にも増産で勝つ為に国の為に危機一髪の生死の境界にさまよった最悪の時代であったのである。私は戦中派だ。一億総決起で、「打ちてしまん」の表題がデカデカと街角の目抜き通りに張られてあったのを記憶している。

敗戦後

だから私の青春時代は戦後のどさくさ紛れでこれから立ち直る、敗戦後の煽りを受けて日本が躍動する、前進だった。

やがて私たち親子は疎開先の居候生活からやっと脱出、チャンスを掴んでまったく別の見知らぬ村へ引っ越しをする運びとなった。

ここは東京の或るA医学博士の持ち家で、敷地が広く、土地全体で約一町歩ほどあった。そのうち畑が八反五畝ほどだった。私たち親子はそこで留守番方々、農業開拓の精神で食糧増産に

みんなで頑張った。A氏の夫人はもと男爵の華族の出身、東京の中野に居住、病院も焼かれた身分の存在だったが、当時博士は疎開の意味で此処を買ったらしい。

先生は時々私たちを訪れては励ましてくれた。そして先生は農業の方も突っ込んで研究していた。先生の研究している農業雑誌の本を見せてくれた。そして私たちに「研究して、研究してやるんだよ」と言った言葉は、私たちへの励ましの言葉であった。畑の野良仕事は天候相手故になかなか大変だった。三年ぐらい此処で頑張った。土地を開拓して種を蒔いて、作物を収穫するまでの農家の思いやりを体験したのである。いまでは機械を利用して一度に沢山耕作も出来るようだが、あの頃の農家は本当に大変だった。

売主が近くに居住、私たちは何かにつけて世話になったが、また協力も惜しまなかった。

それには母の力が大きかったのである。母の労苦は並大抵のものではなかったのだと思う。私はいまでも母を尊敬している。さて、私たちはどうにか一人前に家を建てるメドがついた。その頃A博士は此処を売りに出したい要望があり、のち此処を手放したのである。

そこで私たち親子は土地の人たちに認められ、別の敷地を借りて、まがりなりにも家を建てる段階にまでこぎつけた。その頃兄は建築の方をやっていた。

やがて私は学生時代の中途半端を正すため進学を考えた。幸い私は、小学校六年の時にソロバンの検定を受けていたので、明けても暮れてもソロバンがないといられなかった時代があった。しかし、そうかといって簿記が出来る訳でもない。そこで経済専門の簿記学校に入った。ここでは男子が圧倒的、女子は三名程だった。

私はみんなから「大国王の命」とあだ名をつけられてしまった。それは髪型でそう見えたのだろう、髪を中央から分けて編み下げていたから。やがてそこを修了した。

私は三歳の時に少年漫画『フクちゃん』が好きで好きで、あの角帽を買ってくれ、と攻めたようだ（角帽に下駄を履いた姿のフクちゃん）。かつて姉は私によくそう言った。そして「フクちゃんになってしまえ！」と言われたそうだ。だから私にはあの三歳児の夢であった『フクちゃん』の大学に入ることを前提として考えていたので、矢も盾もなく大学に入りたく、何とかしたく考えていた矢先、村のT氏の推す力で私はとうとう村の役場に就職してしまった。そこではソロバンを生かした仕事で当時の農地改革の初期であった土地の等級、見込み計算、反当り割当てなどで大忙しであった。約一里もある道のりを歩いて通った。のち自転車に乗ることを覚えて自転車で通ったのである。しかし私はその仕事に満足できなかった。

約二年位で見切りをつけて辞めた。そしていよいよ待望の大

学に入ったのである。

さて大学に入ったが、生活の方がそれに並行していかないで、すぐ壁にぶつかかった。友人の紹介で、化学工業関係のN企業の採用試験を受けた。日銀に近い目抜き通りだ。未熟な私を採用してくれた社長のA氏は、非常に頭の切れる人格者で弁護士だった。私は尊敬していた。教育には実に熱心だった。

私が入社してから間もなく日大のI君や慶応のT君が入社、彼らはいずれも定時制だ。私は通信教育である。しかし通信教育ははたで見ていると簡単なようだが、実は至極困難、途中で挫折する者が多く、一年目はどうにか顔ぶれも揃うが、最後まで続かない。私も動揺してその挫折の危機に迫った一人だった。が、どうにか維持。お陰でスクーリングのチャンスにも恵まれた。

私は営業の販売関係の担当で伝票の整理、記帳、仕訳別の原価計算とこれまた大忙しだった。年二回の決算期はまたまた大変だった。

当時私は二六歳と半ば以上を越えていた。だから彼ら日大のI君、慶応のT君からおばさん呼ばわりだった。しかし仕事に關しては人一倍、いやそれ以上勤め、記帳や事務処理も一流のソロバンを自負出来るようになっていた。ある時、得意先の人から社の折に、「此の人は統計をやった方ですか？」と、直接上司に問われたこともあった。こうしたことから仕事に關しての

責任は万全を期していたのである。

やがて私は卒業を契機に八年間の終止符を打った。いろいろ世話になったことを感謝したい。

人生はまさに戦いの連続。この目まぐるしく変動する社会、特に戦後の日本は飛躍上昇の景気で世界を驚かせた。また、いま世界は大きな転換を迎えた。昨年来のソ連の解体、正に驚くべき激変、世界秩序が大きく変わりつつある。

これからは、地球の環境を守り、人類の豊かな未来を志向する平和な世界を実現するために、国際的な文化・親善交流の促進に寄与していきたいと思っている。

